

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1519集

HARA

原遺跡 24

— 第38次調査報告 —

2024

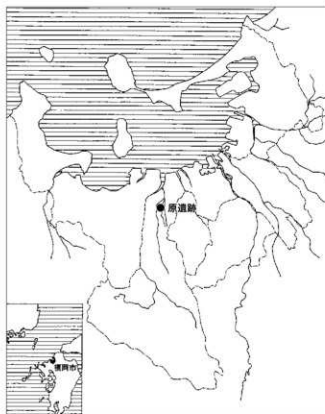
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1519集

HARA

原遺跡 24

— 第38次調査報告 —



遺跡略号 HAA-38

調査番号 2132

2024
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は共同住宅建設に伴い、早良区原8丁目地内で実施した原遺跡第38次調査の成果を取めるものです。

今回の調査では、弥生時代後期の土坑、中世の溝などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査委託者様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 石橋 正信

例言

1. 本書は共同住宅建設に伴い、福岡市早良区原8丁目地内において実施した原遺跡第38次調査の報告である。
2. 検出遺構はビットとそれ以外のものに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ビット SP 溝 SD 土坑 SK
3. 遺構の実測は木下博文が行った。
4. 遺物の実測は山崎龍雄が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6. 製図は山崎賀代子が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より6°20'西偏する。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
9. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号	2132	遺跡略号	HAA-38	分布地図番号	082 原
所在地	早良区原8丁目1162-1・2・3			調査面積	396.6㎡
調査期間	2021.10.18～2021.12.1				

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 遺構と遺物	4
溝	4
土坑	8
ピット出土遺物	11
3 まとめ	12
図版1～7	13～19

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)	2
図2 調査地点位置図1 (S = 1 / 6000)	2
図3 調査地点位置図2 (S = 1 / 2000)	3
図4 調査区位置図 (S = 1 / 500)	3
図5 調査区平面図 (S = 1 / 150)	5
図6 S D01・12実測図 (S = 1 / 80)	6
図7 S D02・04・05実測図 (S = 1 / 80)	7
図8 溝出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	7
図9 S K03実測図 (S = 1 / 40)	8
図10 S K03上層出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	9
図11 S K03下層出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	10
図12 ピット出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	11

図版目次

図版1 1区全景(北西から) S D01(南から)	
図版2 S D02・04(東から) S D05(南西から)	
図版3 S K03上層遺物出土状況(南東から) S K03上層遺物出土状況近景(南から)	
図版4 S K03(南西から) S K03最下層遺物出土状況近景(西から)	
図版5 2区全景(東から) S D12(南西から)	
図版6 出土遺物1	
図版7 出土遺物2	

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、令和3（2021）年4月22日付で、株式会社ミートイン・ハイマートより早良区8丁目1162-1・2・3地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号2021-2-69）。同地内は原遺跡の範囲内であることから、同年7月27日に確認調査を実施し、地表下70～80cmで遺構を確認した。

今回共同住宅建設が計画されており、その基礎工事内容は残存遺構への影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、令和3（2021）年10月18日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。10月19日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、令和3（2021）年12月1日に終了した。

2 調査体制

調査委託 株式会社ミートイン・ハイマート

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査 令和3年度 資料整理 令和5年度）

調査総括	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長	菅波 正人（令和3・5年度）
	同課調査第1係長	本田 浩二郎（令和3・5年度）
庶務	文化財活用課管理調整係	内藤 愛（令和3・5年度）
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長	田上 勇一郎（令和3・5年度）
	同課事前審査係主任文化財主事	森本 幹彦（令和3年度）
		板倉 有太（令和5年度）
	同課事前審査係	三浦 悠葵（令和3年度）
		神 啓崇（令和5年度）
		大森 真衣子（令和5年度）
調査担当	埋蔵文化財課調査第1係	木下 博文

第2章 遺跡の立地と環境

原遺跡は、早良平野の中央、金屑川右岸の標高5～6mの微高地上に立地する。

遺跡の周囲には、金屑川を挟んだ西側の台地上に有田遺跡群が立地し、弥生時代中期～後期の竪穴建物・井戸、古墳、古代の官衙とみられる掘立柱建物群など、弥生時代～中世までの遺構が濃密に検出される。対する東側の飯倉丘陵には飯倉遺跡が立地し、青銅製武器を副葬する弥生時代の甕棺墓が確認されている。南側の外環状線付近には、次郎丸高石・兔・野芥などの各遺跡が分布し、古い時期のものとしては旧石器や初期水田農耕に関わる弥生時代前期の遺物を含む例がある。

遺跡は大きく東西2つの南北方向の微高地上に展開し、今回の調査地点は西側の微高地上、遺跡全

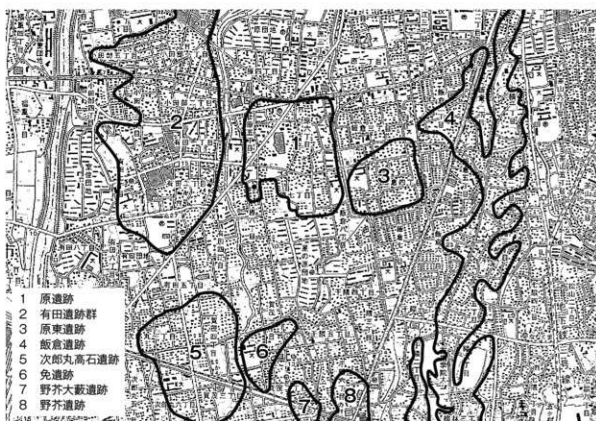


図1 遺跡の位置 (S=1/25000)



図2 調査地点位置図1 (S=1/6000)



图3 调查地点位置图2 (S = 1 / 2000)

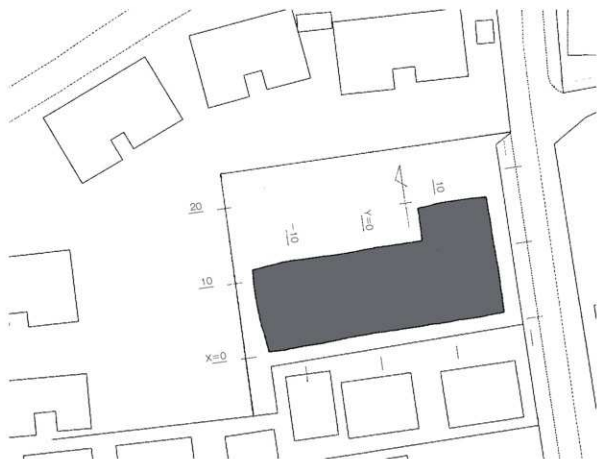


图4 调查区位置图 (S = 1 / 500)

体の南西端に位置する。

過去の調査は本調査地点より北側で9次をはじめ各調査が実施されている。直近の9次・22次調査では中世後期の溝が確認され、方形の居館域を成すことが判明している。27次調査では方形の居館域の北東角が検出され、ある時期に居館域が拡大されていることが明らかとなった。また文献史料から名主金丸氏の屋敷跡と推定された。

9次調査では他に弥生時代後期前半および古墳時代前期の溝から、溝祭祀を示す状況で土器群が出土している。

- 9次 「原遺跡2」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第140集 1986
- 22次 「原遺跡11」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第818集 2004
- 25次 「原遺跡13」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1129集 2011
- 27次 「原遺跡15」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1168集 2012
- 35次 「原遺跡21」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1400集 2020

第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、遺跡の南西端に位置し、中世後期の居館を囲む大溝を検出した9次・22次調査地点の南側隣接地に当たる。現地表面の標高は6.5～6.7mである。排土処理のため、調査対象範囲を東西に2分割して調査した。東半を1区、西半を2区とし、1区より開始した。

遺構は現地表面下70～80cmの地山である黄褐色シルト層上面で検出した。標高5.8～5.9mである。中世の溝・弥生時代後期前半の土坑・ビットである。出土遺物は土坑から弥生時代後期前半の完形の壺・甕、溝から12世紀の同安窩系青磁碗など、コンテナ6箱分である。

遺構はビットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

2 遺構と遺物

溝

SD01 (図6、図版1)

1区東端、調査区東壁際で検出した。検出長13.7m、幅1.7m、深さ0.3mの南北方向である。出土遺物 (図8)

1は瓦器碗の底部で復元高台径5.8cm、灰オリーブ色を呈す。2・3は弥生土器。2は壺または鉢の底部で復元底径11.2cm。3は高杯の脚部。いずれにもぶい黄橙色を呈す。

SD02・12 (図6・7、図版2・5)

SD02は1区北端、SD12は2区北端で検出した。東西方向で、それぞれに遺構番号を付したが、走向から同一の溝とみられる。幅0.45～0.7m、深さ0.1～0.2mで、総検出長29.5mである。東端でSD01に合流する。SD02・12とSD01の覆土は共通し、明瞭な切り合いは認められない。出土遺物は細片が多いが、SD12で同安窩系青磁碗の底部片が出土していることから、12世紀、平安時代末期とみられる。

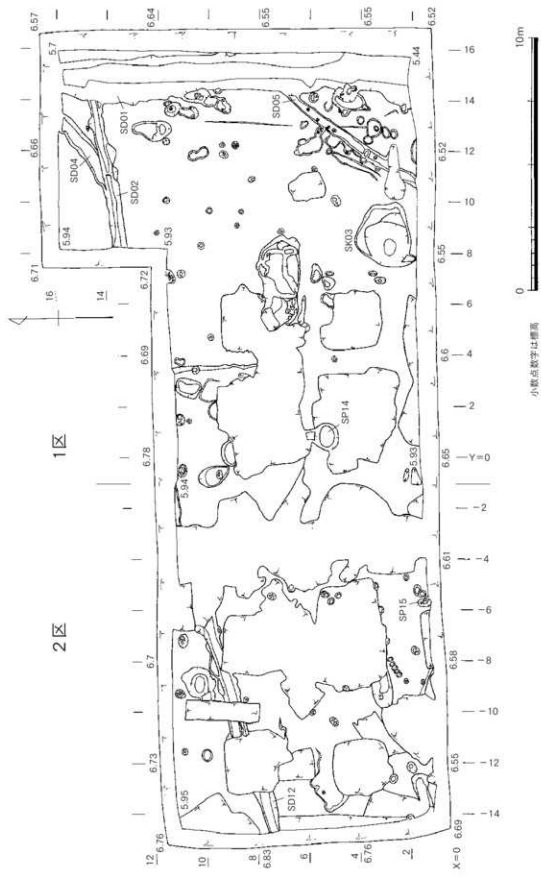


图5 調査区平面图 (S = 1 / 150)

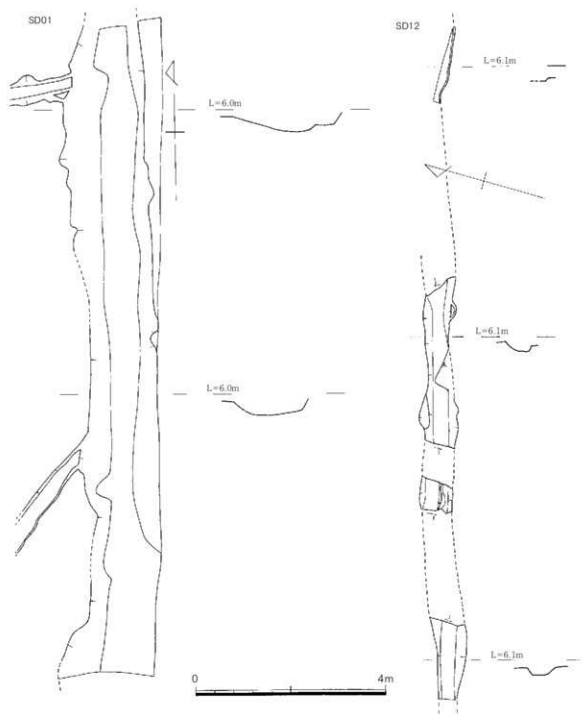


図6 SD01・12実測図 (S = 1/80)

出土遺物 (図8、図版6)

4・5は土師器皿。底部の調整は回転糸切りで、5は板目が残る。6は白磁碗の口縁部。7は中国産同安窯系青磁碗。高台部を除く体部内外面に灰オリブ色の釉をかけ、櫛描文を施す。底部内面に重ね焼きに伴う釉の輪状掻き取り痕がある。

SD04 (図7、図版2)

1区北端で検出した。検出長2.8m、幅0.65m、深さ4~11cm、走向は南西から北東で、SD02に

切られる。

出土遺物 (図8)

8は弥生土器の底部片で灰褐色を呈す。

SD05 (図7、図版2)

1区南半で検出した。検出長6.6m、幅0.4m、深さ5cm、走向は南西から北東で、東端でSD01

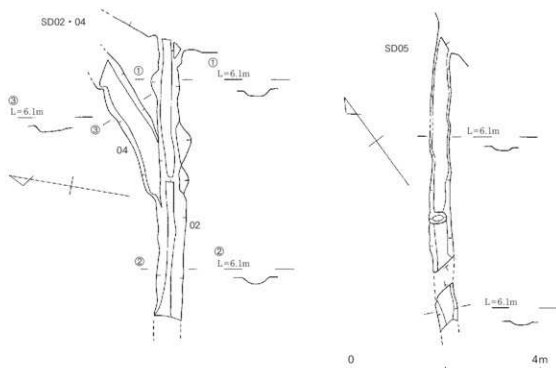


図7 S D02・04・05実測図 (S = 1 / 80)

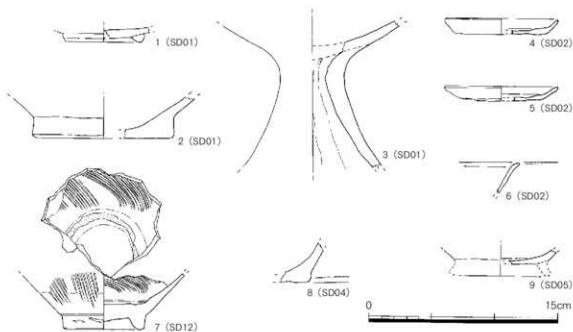


図8 溝出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

に合流する。

出土遺物 (図8)

9は土師器椀の底部片。高台は貼り付けて径7.4cm、内面は褐灰色を呈し、丁寧なミガキを施しており、黒色土器A類か。

土坑

SK03 (図9、図版3・4)

1区中央、調査区南壁際で検出した。2.45×2.2mの不整形形で、深さ1.0mである。上層で甕、底部で複合口縁壺の完形品が出土している。出土している壺の口縁部形態から弥生時代後期初頭とみられる。遺物の出土状況から当初井戸の可能性を考えたが、その痕跡が明瞭でないことから、土坑とした。

出土遺物 (図10・11、図版6・7)

10~22は弥生土器。10・17は甕・壺の底部。10は残存高8.6cm、底径7.6cmで明赤褐色を呈す。17は底径8cm、橙色を呈し、わずかに赤色顔料が残るか。11は鉢。復元口径18.4cm、器高9.9cm。体部外面下半に粗い縦ハケ目、口縁部内外に横なで、体部内面下半に丁寧なで、内外面に赤色顔料を塗布する。12は甕。口径12.0~13.3cmでひずみが大きく、器高12.8cm。にぶい黄色を呈す。粘土塊から作り出して表面を削り落とし、全体として手捏成型で、指抑え痕が顕著である。底部外面に下敷きらしき痕跡が残る。一部に粗い縦ハケ目がある。13は壺の胴部。復元胴部径25.2cm、にぶい褐色を呈し、胴部内面のうち2条の突帯の貼り付け部には指抑え痕、それ以外には工具痕が残る。外面は縦ハケ目を基調とする。14・19~22は袋状口縁の壺。14はにぶい黄橙色、19は橙色、20は灰褐色、21

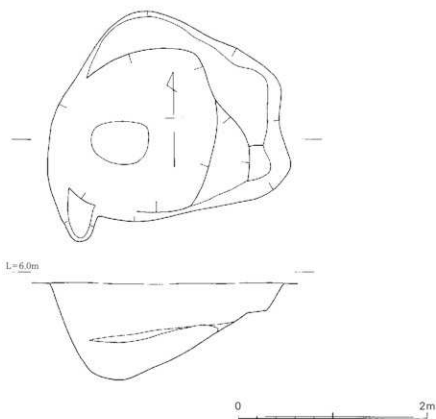


図9 SK03実測図 (S = 1 / 40)

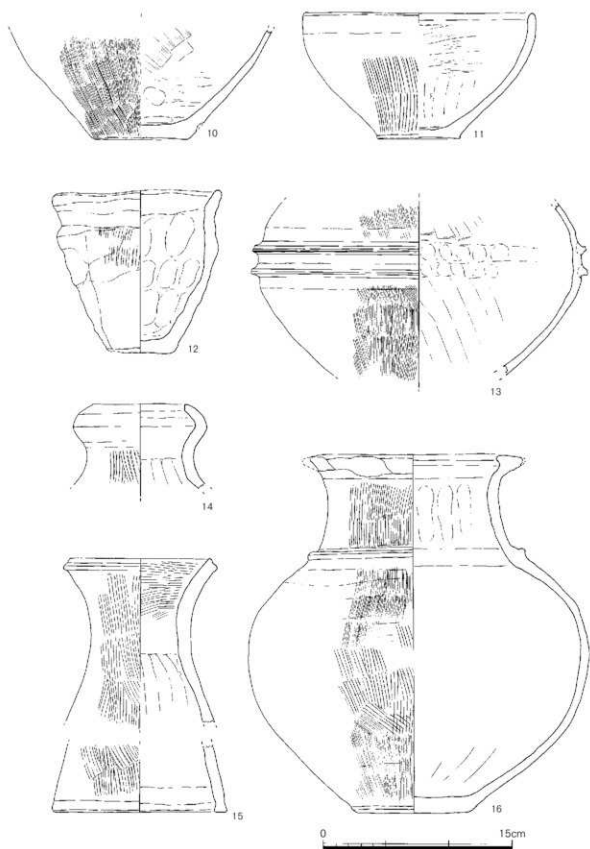


图10 S K03上層出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

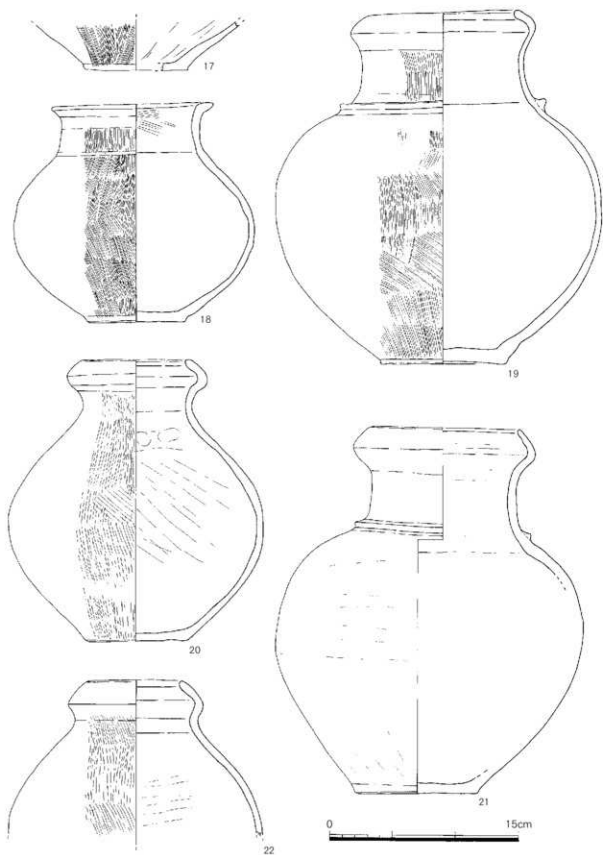


图11 S K03下層出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

は橙色で体部外面上半に赤色顔料を塗布、22は灰黄色を呈す。15は器台。にぶい橙色を呈し、外面と内面上端にはハケ目、内面下半はなでを施す。16・18は壺。16は器高28.3cm、口縁部内径14cm、にぶい橙色を呈す。鋤先状口縁で端部に打ち欠きが見られる。18は器高17.3cm、口径12.7cm、浅黄色を呈し、外面に細密な縦ハケ目を施す。

出土層位は10～16が上層、17～22が下層で、特に20～22は最下層の一括出土である。

ピット出土遺物 (図12、図版7)

23～28は土師器。23は丸底碗。口径10.4～10.6cm、器高2.5～2.9cm。橙色を呈し、外面に指押え、内面に丁寧ななでを施す。型作りか。24は壺の口縁部。にぶい橙色を呈す。25は甕の胴部。にぶい黄橙色を呈し、外面に細密な横ハケ目を施す。26は高杯の脚部。復元口径16.4cm、橙色を呈す。27は布留式の甕。復元口径18.6cm、残存高17.4cm、にぶい黄橙色を呈し、体部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。28は高杯または器台の脚部。橙色を呈し、細かいなでを施す。

23～27はS P 14、28はS P 15出土。

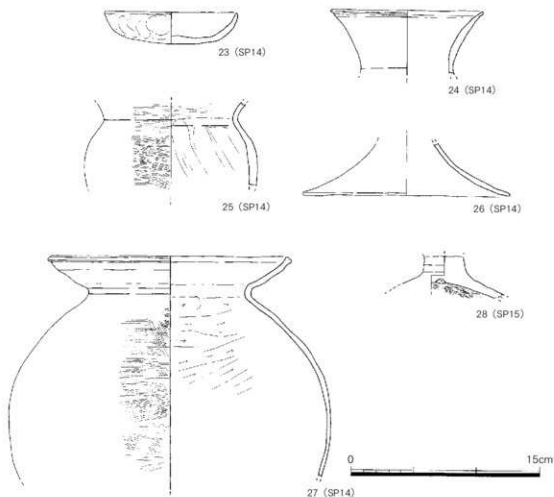


図12 ピット出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

3 まとめ

今回の調査では弥生時代後期～中世の遺構を検出した。時期別に概観し、まとめたい。

検出遺構の中で最も古いものはS K03である。完形の甕・壺が出土しており、その形態から弥生時代後期前半、中でも初頭に近い時期に位置づけられる。上層より土器がまともに出て出土し、底部では完形の壺が横たわった状態で出土している。湧水層まで深く掘り込まれていなかったことから、土坑として報告したが、以上のような遺物の出土状況は、祭祀遺物として完形の土器群を埋置する同時代の井戸と共通している。

周辺における同時期の関連遺構としては、次のようなものがある。

調査区北西側直近の9次調査では、南半で南西から北東に延びる現存長47m・幅1.4～2.1mの2号溝、北西側で南から北東に延びる4号溝下層から弥生時代後期前半の土器がまともに出て出土しており、溝祭祀の様相を呈している。

9次調査地点の北東に位置する25次調査では、S K012から弥生時代後期初頭の土器がまともに出て出土している。

ただこれらと同時期の居住遺構は見つかっておらず、集落の縁辺部のようなものである。

時代が下る遺構としては、調査区東端で検出した南北溝S D01、これに合流するS D02・12・05がある。S D01はまっすぐ北側の22次調査地点へ向かっており、延長すると同調査地点で検出した中世後期の溝S D002につながりそうな位置にある。ただS D01は出土遺物から中世後期まで時期が下らないとみられること、22次S D002は北へ直角に曲がり、南側に延長とみられる溝が検出されていないことから、関連ないものと考えられる。

他にS D002に切られる溝として、現在の磁北方向に直線的に延びるS D011が報告されている。覆土や出土遺物の内容から比較すると、S D01は22次S D011とつながる可能性が高い。22次S D011は古代末～中世初頭と推定されている。本調査のS D01とS D02・12は明瞭な切り合いが認められず、S D02・12から12世紀代の同安系青磁碗片が出土していることと矛盾しない。この場合総延長70m以上に及ぶ。S D05もS D02・12と同様S D01に取り付け支線の溝とみられる。

本調査地点では、ピットも少なく建物もなわず、方形の区画の外に当たるため、全体として遺構密度は低い。

以上遺構・遺物量は比較して少ないが、S K03の出土土器群は弥生時代後期前半の資料として一括性があり、遺構の時代認定の基準となる土器編年の検討に当たっても良い資料を得ることができた。中世後期の方形居館域を遡る古代末～中世初頭の遺構分布状況も気にかかることである。今後周辺域での同時期の遺構の検出が期待される。



1区 全景 (北西から)



SD01 (南から)

図版2



S D02・04 (東から)



S D05 (南西から)



S K03上層遺物出土状況（南東から）



S K03上層遺物出土状況近景（南から）

図版 4



S K03 (南西から)



S K03最下層遺物出土状況近景 (西から)



2区 全景 (東から)



SD12 (南西から)



出土遺物 1



出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	はらいせき								
書名	原遺跡24								
副書名	第38次調査報告								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第1519集								
編著者名	木下博文								
編集機関	福岡市教育委員会								
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1								
発行年月日	2024年3月22日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因	
		市町村	遺跡番号						
はらいせき 原遺跡 第38次	ふくおかしまがらきくらは 福岡市早良区原 8丁目1162-1・2・3	40137	0311	33度 33分 42.91秒	130度 20分 25.39秒	20211018 ～ 20211201	396.6	記録 保存 調査	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項			
原遺跡	集落跡	弥生～中世		溝、土坑、ピット	弥生土器、土師器、 須恵器、中国産磁器				
要約	原遺跡は早良平野の中央、金屑川右岸の微高地上に展開する。今回の調査地点は、遺跡の南西端に位置し、中世後期の居館を囲む大溝を検出した9次・22次調査地点の南側隣接地に当たる。現地表面の標高は6.5～6.7mである。遺構は現地表面下70～80cmの黄褐色シルトの上面で検出した。標高5.8～5.9mである。弥生時代後期前半の土坑、中世の溝、ピットを検出した。出土遺物は土坑から弥生時代後期前半の完形の壺・甕、溝から12世紀の同安窯系青磁碗など、コンテナ6箱分が出土している。								

原遺跡24

－第38次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1519集

2024（令和6）年3月22日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 魚住印刷
〒812-0033 福岡市博多区大博町8-20

